

## いまなぜ「ストップ結核パートナーシップ日本」なのか？

ストップ結核パートナーシップ日本  
代表理事 森 亨



1970年代、予防、診断、治療の近代的な道具立てがそろったころ、欧米そして途上国を巡る国際社会で、医療や政治の関心は結核からどんどん消えていきました。「結核はこのまま惰性で消える——」と。これが15年、20年後にたいへんなツケとなって返ってきました。1980年代後期の米国はじめ多くの先進諸国の結核逆転・停滞、そして多剤耐性結核の出現、そして途上国の「結核爆発」です。折からのHIVの流行がこの火に油を注ぎました。

いささか遅まきながらこれに気づいた国際社会は1990年代後半からDOTS（ドッツ）を武器に結核との戦いを、先進国、途上国双方で展開しました。その中で当事国はもとより、それらに関連する官民すべての組織、機関が一つの目標を目指すパートナーとなって、同じ舟(ship)に乗り、結核流行の荒海を漕ぎ切ろう、という運動が起きました。2000年に出帆したStop TB Partnershipの運動です。この世界的な努力の甲斐あって、ごく最近ではようやく明るい将来が見えかけてきたところですが。しかしまだまだ手をゆるめるわけにはいきません。

このパートナーシップの「お国版」がいくつもの国で作られています。先進国で真っ先に（2001年）できたのはカナダでした（Stop TB Canada, [www.stoptb.ca](http://www.stoptb.ca)）。カナダの結核罹患率は人口十万対4（日本の5分の1）ですが、世界の結核問題に対する政府の関与を強めることを目的としてこのパートナーシップができたのです。このなかでカナダは世界抗結核薬基金の最大の資金提供国となり、パートナーシップの議長国となりました。

さて、それで日本です。1999年の結核緊急事態宣言以来国内の結核問題への関心は幸いにして大変盛り上がりました。それに並行して結核対策の見直し（我々関係者の思い入れでは「強化」）が検討されました。そして、紆余曲折を経て結核対策は感染症法への統合というかたちで新たな出発を果たしました。しかし、「これで一段落」「結核も減ったから、これからは感染症の one of them ね」と思われたら大変です。今の日本の結核は、米国の逆転上昇の原因となった「手抜き」を始めた1960年代終わりから1970年代初めの状況と似たレベルにあります。ここでいい加減なことをすれば前車の轍、10年後にツケが来ることは目に見えています。大いに緊張して新しい結核対策の現場への適用を果たさなければなりません。しかし現実には医師や看護師不足、結核医療の構造不採算、結核病床廃止、保健所の統廃合... 問題が次々と浮上しています。その一方で結核問題は、対策の見直しを始めた8年前よりもさらに眼に見えて手強くなっています。社会的、医学的弱者への集中、集団発生の増加・複雑化等々。これらへの取り組みの大もとはやはり、医療や行政の結核に対する意識という緊張というか、「結核はまだある！」という姿勢でしょう。

一方、日本を含む世界の結核に目を転ずれば、その対策に対する日本の果たすべき役割について考えないわけにはいきません。世界第二の経済大国として日本は国際協力にそれなりの貢献をしなければなりません。具体的に何を、どう、という面で見ると、いわば日本のお家芸だった「結核対策」を押し出さない手はないでしょう。長く続いた不景気のなかで政府開発援助の予算はひところの半分くらいに減ってしまい、実際結核についてもう一つ元気がありません。

多くの先進国では、国内で発生する結核患者の半分以上が外国人です。日本も近い将来必ずそうなります。近視眼的ないい方をすれば、途上国の結核対策は日本の結核対策になるのです（情けは人のためならず）。もっと重要なのは、世界の結核への関心や関わりは、足もとの結核問題への適切な対応につながる、ということでしょう。

そこでストップ結核パートナーシップ日本の立ち上げとなります。国の内外の結核問題に対して、医療界や行政、そして国民一般の「関わり」「関心」を強化しよう、それを通して「結核のない国、世界を作ろう」というのがこの運動の目標です。そのために、いろいろな持ち場や業務をもっている団体（パートナー）がこのスローガンのもとで大同団結して、大きな声を上げよう、声を掛け合おう、というのが趣旨です。昨年11月発足しましたが、おりからのG8サミットや第4回アフリカ開発会議（TICAD-IV）の日本開催もあって、国際協力に対して深く関心を持たれている国会議員さんたちが熱心に支持して下さっていることも心強いことです。今後この運動をいかに強力に推進していくか、最大のパートナーとして、また事務局を引き受けている組織の一つとして、結核予防会は重い責任を問われることとなります。

タイトル：俳人尾崎放哉の「咳をしても一人（Coughing even; alone）」から。咳をしても1人じゃないぞ！

Coughing even; not alone

ストップ結核パートナーシップ日本だより No. 3